土佐日記 一考察
ーどうして女性仮託にしたかー

姜　泰　國

目　　次

Ⅰ. 序　　論
Ⅱ. 本　　論
　1. 貫之その文藝史的位置
　2. どうして女性假託にしたか
Ⅲ. 結　　論
　注　　釋
　參考文獻

Ⅰ. 序　　論

平安女流日記文學にふれようとすると、どうしても、土佐日記につき當り、土佐日記ともなれば、女流日記の先驅者紀貫之が台頭してくる。

本稿では、紀貫之がどういう時代に生きたかその文藝史的位置を考察し、あわせてその文藝史的意義を摸索するという方法で論述するつもりである。

それから、この土佐日記の開卷第一句にあらわれる女性假託の問題をめぐつて、人間不信的な面と文藝學の先驅者的な面からさぐる方法で、前者においては、貫之の少年時代の周邊をさぐりながら、その影響、そして晩年における喪失感孤獨感などからくる人間不信的な面を引き出そうとしている。

後者の文藝學の先驅者的な面から肯定的立場で、土佐日記の根本理念と貫之の眞面目をとらえようとするものである。

なにしろ、平安女流日記の研究歴が、まだ淺い筆者だけに、どれぐらいまとめられるかいろいろと不安にかられている。

Ⅱ. 本　　論

1. 貫之その文藝史的位置

漢學と和歌の素養を深く、身につけていた貫之の名が史上最初に見出だされるのは、貫之二十五

才ぐらい時、寛平五年(893)九月以前の「是貞親王家歌合」「寛平御時后宮歌合」に新進歌人として参加したときと、そしてこの二回の歌合の歌を主要な資料として編修された「新撰萬葉集」とにおいてである。

以後、宮中歌人として、歌合、屏風歌、賀歌の作者となつた。 貫之は、着實な努力によるつて得られる分相應な出世を願い、和歌再昌の文化政策に沿つて醍醐新帝の庇護を仰いだのである。また右大將定國の從弟の兼輔に極めて接近して親しく從つていた。

この二人は貫之が土佐守再任中に逝去するが、この二人の死は、晩年の貫之の作「土佐日記」における女性假託の一つの要因にもなるのである。 また醍醐天皇から「新撰和歌集」の單獨編纂の勅命まで受けるが、この集が日の目を見る前に彼らに喪られるが、その「新撰和歌序」に

橘山晩松、愁雲之影已結。
湘浜秋竹、悲風之聲急幽。

とあるのは撰進の下命者である醍醐帝の崩御をいい、續く

任勅納言、亦已薨逝。

とあるのは中納言兼輔の薨をいつているのである。 だが、上述の二人が生存していたとき、延喜五年(905)貫之三十七才ごろには、醍醐天皇の勅命をうけて、從兄の紀友則、凡河内躬、壬生忠岑とともに最初の勅撰集「古今和歌集」の撰者となる榮譽をになつた。

集中に採られた貫之の作は最も多い。 この歌集の卷頭に「假名序」を書いて、歌學上の理念の確かさと修辭文章の仕事を通じて貫之は、實作においても歌論においても、自他ともに當代歌壇の第一人者となり、いわゆる「古今調」の代表者として後世歌道の師と仰がれることになつた。

延長八年(930)には土佐守として赴任、在任中に醍醐天皇の勅を奉じて「新撰和歌」を選び、歸洛後、これに流麗な漢文の序を書き添えている。

任滿ちて、承平五年(935)に歸京したが、この歸途の海路日誌に手を入れたものがいわゆる「土佐日記」である。 萩谷朴氏は、

「古今集」以來一千年の和歌の傳統の上に立って、因襲的な和歌の脱皮新生を叫ぶことは容易であるが、平安朝初期百年の暗黙と斷絶とを經た不毛の地に新しく和歌再昌の發芽を育て、見事にこれを開花させた貫之達の功績、從って「古今集」の持つ歴史的な意義をそんなに輕んじてよいものか。[1]

と述べているように貫之の文藝史的な功績を高く稱讃している。 また、小西甚一氏は、貫之のこととその文藝的變革について、次のように述べている。

1) 萩谷朴氏「土佐日記全注釋」p.478.

歌壇の中心的存在として、外來の詩風を新しい和歌的感覺に生かしていつた指導者が、紀貫之その人なのである。[2)]

と述べながら、さらに氏は、永遠をめざすものが藝術であり、永遠をめざすとき、その精神は二つの極をもち、その一つは「完成」であり、他の一つは「無限」であると言い、完成と無限とは北極と南極のように對蹠的でありながら、ひとしく永遠への方向をもつ。 兩極性が藝術に投影するとき、完成の極に向うものを「雅」、無限の極に向うものを「俗」と言つた。 雅なる表現は、いつも「すでに存在する表現」であろうとし、もともと「できあがつたもの」である。

だから先例のない表現は、注意深く排除されるから、ちやんと先例をもち安定している表現のみが用いられる。 「俗」はいつも「未だ存在しない表現」に向い、新しみに向つて積極的に行動する。 當時「雅」と認められた境界から、ちよつと踏み出したところに、何か「おかしな」ところがあり、だから雅の側から觀るとき「おかしみがあるので、俗だけの觀點からは、おかしくも、何もない、といいながらさらに、「土佐日記」になると、彼の思想はすこし變つていき、そこに深い人間的圓熟が觀られる。 どう變つたか、ひとくちに言うと「雅」に包まれていた「俗」が、「雅」を破つて、「俗」なる姿をあらわしたと斷言している。

また古く、藤岡作太郎氏は、貫之がどう變つたかを、古今集の序と土佐日記との眞價を比較しながら、次のように觀ている。

「古今集序と土佐日記とを並べて見よ。 序は、文に抑揚頓坐あり、秩序整然、名將が三軍を率いて行進するが如くなれども、華美に過ぎ、語句の雕琢を主として、情熱に闕くるところあるが如し、日記に向へば、鰻鱔の厚味に厭いて奈良茶の淡泊に舌うつが如く、しかもいうべからざる興趣のその中に存するを見る、これすなわち中古の綺語麗句を重ねて無意義の文を飾る弊に懲りて、近世の士が日記を難稱する所以なり。[3)]

と、先述の小西氏の見解をうらづけるように、稱讃しているのである。

ともかく、貫之の土佐日記以前の日記[4)]は、すべて漢文による記錄に始まり、まず政治的なる事件や公務に關ある朝廷の記錄であつた。やがつて個人的にも、公人としての行動や關係のある公事についての日記が記されるようになり、とくに儀式作法の先例を重んじる平安時代になると、これら公私の日記の著しい發達が見られる。このような内容の日記において、たまたま筆者の心情が示される場合があつても、その多くは、政治的意識、家父長的意識にもとづくものであつて、それを直ちに人生と結びつけて文學的な問題として考えることには躊躇されるようなものである。

2) 小西甚一氏「土佐日記評解」の解說を參照。
3) 藤岡作太郎氏「國文學全史1」平安朝篇、p.203.
4) 當時漢文で書かれた日記という言葉は廣い意味で使っており、各種の例がみられるが、たとえば、ある一事件の眞相を調査記錄したものを日記とよんでいる例が多い。

當時の男性にして文筆を操ることができるものは、だいたい公的な位置にあつたし、公的な場で用いる文字は漢文であつた。 だから當時の男性は、不自由な漢文の學習に没頭しなければならない事情があつた。 中國風の律令によつて、官僚の採用試驗が漢文一本槍であつたからである。だから當然日記にしても漢文によつて書かねばならなかつた。

宇多天皇以後, 私日記がはなはだしく增加した。 私日記は攝關大臣以下いづれも公家達でしかも日記記載の目的が自己および自家の子孫のために公務上の失敗がないよう參考にするものであつたから、私日記といつても、その內容は、政務上の行事にかかわるものを主としている。 記事の正確ということが最も重んぜられることは當然であつて、したがつてその本質は毎日の事を記すということが 重要であつた。

これらの公家日記は、一定の規定樣式はもちろん、その精粗、體裁、筆法などは個人によつてそれぞれ異なつている。 これらの公家の私日記には段々と個人的な特徵があらわれるようになつてくる。

すなわち、平安時代の私日記は、內記日記、外記日記、殿上日記[5]などが公事を正確に 書くという立てまえからのみ書かれていることに對して、もつと自由なものを書こうという欲が高まり、自由で文學的な香り高い假名日記の流行に平行して公家日記が盛んになつて書かれたのだが、こういう女流日記にくらべて、男子の日記はもちろん公的記錄の記事で滿たされていることは言うまでもないのである。

先に、女流日記といつたが、藤原氏の臺頭する前は、女性にはその途が塞つていただけに、漢文を學ぶことはなかつた。 が、律令のくずれと藤原氏の進出となり、藤原氏は皇室と結びつけられ女性進出の道もひらけて來たのである。 そこで後宮の女性たちの私的にして、しかも公の性格をあびた假名文の台頭を見るようになつたのである。 さらに後宮入りを目ざした貴族女性の、大切な教養として、假名による歌と散文とは、いよいよ洗練されることになつたのである。

この女子の手による假名日記とくらべて、男子の手による日記は、漢文記錄として日次に記すという本質より發し、實を記すことに重要性があつたのである。 そしてその內容からみると廣く社會各般の事實にいたるものがあり、また、たんに自己一身の事實に限られたものもある。 これらの公家日記とともに私日記から、女流日記ほどの文學性、自由性は見られないが、かなり個人の思想、趣味が見られ、文學史などに參考になる材料が少くなく、また、これらの漢文日記は、文學と

5) 內記：すでに散逸して、住史抄に仁和二年十二月、芹河行幸內記を引き、また北上抄に內記所記として延長六年內宴叙位條の一節を引いてあるのみで、職員會に「大內記二人常造詔勅、凡御所記錄事、中內記二人掌同大內記、少內記二人掌同中內記」と見えている。
外記：類聚符宣抄、第六外記職掌の條に「應御所記錄庶事外記內記共預事」とあつて、これによれば弘仁六年以來、外記にもまた內記と共に御所の行事儀例などを記錄する樣になつた事が明らかである。
殿上：藏人が記錄したもの、藏人は嵯峨天皇の弘仁元年に置かれ、これを殿上日記と稱したのは淸涼殿の殿上で記錄するためである。

しての第一史料でもある女流日記と平行として盛んに書かれ、しかも両者はたいへん關係が深いと言えるだらう。　というのは女流日記および物語文學の内容および成立年代などの詳細な研究に當って、この漢文日記に書かれている内容によって充分な比較検討を加えながらその史實的なるものの眞否なるものの裏付けをとれるからである。　だが女流日記は、女性自身によって創出したものではない。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。

という土佐日記は、女性の間の假名文の台頭に注目した貫之がこれを公的なものにまで推し出すはたらきをつとめたものとして重大な意義を擔っていると思う。

女性が身の上話を書く口火は、却って貫之という男性によって、切られたのであって、それから四〇年を隔てて「蜻蛉日記」が書かれたが、これはその後の日記文學に對する手本[6]として十分な貫祿を示したものと考えられるのである

また、この土佐日記が開拓[7]した點は、　單に假名書きの日記というようなものばかりではなく從來の日記の公事記錄的性格、たとえば、「中外抄[8]」の

「日記は委しく不可書。　人之失又可書。　只公事をうるはしく可書也。

などという「べし」「べからず」でしばられた日記の規格を打ち破り、また、固定化した宮廷の行事、門閥家柄による世襲的な身分制度をますます助長し因習化する男性の有職故實の參考としての日記を打ち破ることにあり、そしてなにものにもとらわれることなく自由な筆者の心情を表明し、自己を主體に世の中を見つめて行こうとする道をも開いたところにこそあったとも思われるのである。

だから、學者たちは口をそろえて、この土佐日記を皮切りに平安女流日記がはなばなしく花を咲かせたと稱讃しているのである。　そのうちの一人、重友毅氏の言うところを聞いてみると、

この作品が竹取や伊勢の後を受けて、次いで起るべき假名文による文學作品のために、大きな道を切り開いた功績をも見のがすわけには行かない。[9]

6) 王上琢弥氏「平安日記と物語との關係交流」によれば、「土佐日記や蜻蛉ごときは、假名文習練の途上にあるものであり、女流作家の目と腕とを磨く役をしたものと考える」とある。
7) 西下經一氏「日記文學」（解釋と鑑賞，昭和29年1月）p.36によると「一つは公式の漢文に對して私的和文を發達させようとしたこと、今一つは男子の表現樣式に對して女子の表現樣式を發達させようとしたことである」と貫之がこの日記を書いたその意義を述べている。
8) 中外抄：（藤原忠實述、中原師元筆錄）久安四年（1148）五月二十三日條續群書類從所收、これは平安末期のものであるが、承平頃においても、公の日記を書く心がまえは、これとひどく變りはなかっただろう。
9) 重友毅氏「土佐日記について」（平安日記、國語國文學研究集大成）

もって、前人未踏の地に、個性の凝視に基盤をおく自照的文學の先驅として打ち立てられた土佐日記は、ある意味では人間性解放の輝しい記念塔でもあり、また廣く日本文藝解放の一線にも連なるものであって、その作品の意義はすこぶる大と言わねばならないと思う。 しかしまた、こういう土佐日記を生成させた貫之の高くして逞しい作家精神も、あわせて稱揚せられるべきである。

2. どうして女性假託にしたか

土佐日記は量的には非常に短小の作品であるが、しかしそこに盛り込まれた作者の企圖は、とめどもなく多面多角である。[12] その點において、この日記は文學作品としての妙味を多量に含むのである。

この日記は自己の氣質や感情を現わし、土着の人情風俗に觸れ、舟足のおそいことをかこち、海賊のうわさにおののき、土佐で失った愛兒を悲しみ、京都の家の荒廢を歎き、その間に氣むずかしい皮肉や氣輕なユーモアを飛ばすなど、さまざまの好テーマを簡潔な文章でさらりと書き現わしているのである。 ところが、この土佐日記は、

男もすといふ日記といふ物を女もして心みむとてするなり。

という一文から始っている。 この斷り書きについて從來いろいろ考察と論議がなされている。

筆者は、この女性假託をとり上げて、人間不信的な面と文藝學の先驅者的な面、この二つの側面から考察してみるようと思う。

人間不信的な面は、少年貫之の周邊から摸索するという方法をとってみたいのである。

貫之は徹底した合理主義者であり、知性豐かな人物であっただけに、現實の社會問題に對しては、冷靜な批判者であったし、また氏族の歷史や官政界の動きに對しても透徹した史觀を持っていたはずであるから、その人生觀は、人間不信の念によって貫ぬかれていることとなっている面がうかがわれる。

ほとんどの學者たちは、紀貫之という日本文學の歷史に偉大な足跡を殘こした一個の人格に對して、紀氏敗退の歷史から生まれ出たものであり、その個性は紀氏敗退の歷史の中に育てられたものであると見解を同じくしているものである。

當時の氏族社會が個人を規制する力は大きかったのであるから、貫之個人を論ずるに當たって、その家系と家運とを十分考慮に入れないで考察することはできないだらう。

---

12) 萩谷朴氏「日記文學」(解釋と鑑賞昭 29 年 1 月號) p.27 によれば、㋑日記文學としての形態、㋺記行文學としての素材、㋩戲曲的な性格に立つ構成、㋥歌論書としての第一主題、㋭諷喩書世の書としての第二主題㋬誹諧滑稽の文學としての遊び、㋣亡兒追憶の心やり、㋠假名文の普及、㋡民謠の蒐集などにその性格を分類定義している。

貫之が誕生したであろう、貞觀十年（868）頃、紀氏一族は、應天門の變[13]を機會に、わずかな緣累を口實として不法な重刑などに處せられるはめになった。 昔日の榮光も全く消え失せて、政權の座に近づくなどということは、夢にも思いかけられぬみじめな狀態であった。 おそらく、この時が、紀氏一門の最も零落していた時期であったであろう。

幼時の貫之は、祖父の從弟である歌人有常老人の口から、紀氏の家系[14]にまつわる數々の昔話を聞かされたことであろう。 それは、世間にありがちな老人の愚痴であり、過去の夢をおうただの懷舊談であったかも知れない。 しかし皇位繼承問題に關して北家藤原氏と覇を爭うだけの意氣を持っていた有常の主觀を通して幼い貫之の腦裏に刻み込まれたものであったとしたら、それが貫之の人間形成に大きな影響力を持ち、貫之の生涯を左右する重大な結果をもたらすものであったと考えられることは當然である。

官人としての貫之の處世に現れた彼の人生觀と實績、歌人、文學者としての貫之が生涯になしとげた數々の業績、それらの徵候に有常の口を通じて語られた、紀氏一族の歷史が反映していると考えられる。

貫之の周邊には、曾祖父および歌人有常が雅樂頭の經歷をもっていたし、貫之の生母が內教坊の伎女、倡女の類いであったので、貫之の幼年時代に歌舞音曲に對する趣味が養われたと考えられることである。

武藝を本とし、儒學を副とする紀氏の門統には、先天的に和歌の才能が流れていたとは思われない、また、延曆から貞觀にいたる平安初期約一世紀の間は、男子貴族知識社會にあっては、漢詩文一邊倒の時勢であったから貫之の和歌に關する能力が後天的なものであったと考えられる。

光考、宇多、醍醐三代にわたる和歌再昌の新風が、貫之を刺戟して、和歌に傾倒させたのであろうが、ついに時流の先頭に棹さして歌壇の指導者たる地位を貫之に占めさせるに至った基礎的教養と旺盛な意欲というものが實は、少年時代の貫之が身近かに呼吸した有常周邊の和歌的雰圍氣によって啓發されたものと考えられる。

有常の二人の娘は高名な歌人在原業平、歌人藤原敏行、それぞれの妻である。 惟喬親王を中心としての有常・業平の結合は極めて親密であったために、少年貫之は有常・業平同座しての談話を

---

13 應天門の變：淸和天皇（貞觀8年）の代に、平安京應天門の炎上をめぐる疑獄事件である、はじめ大納言伴善男（よしお）は、この炎上を左大臣、源信（みなもとのまこと）の放火だと訴えたが、太政大臣藤原良房らの工作で源信は無實となった、その後眞犯人は善男の子中庸（なかつね）と告げるものがあり、善男らは遠流、共謀者紀豐城らも流罪になった、これで藤原氏は古來の名族大伴紀兩氏を政界から驅逐、良房は臣下最初の攝政となり、藤原政權確立の地歩を固めたのである。

14 紀氏：元來、紀の國（木の國：紀伊國）の國造の家柄である。 貫之五世の祖船守高祖父愛長、曾祖父興道らはなお勇武の聞えが高かった、船守の娘は桓武天皇の妃となり、興道の弟、名虎の二人の娘は、それぞれ仁明、文德兩帝の更衣、妃となって、朝廷の外戚としての勢威を保っていた、このころには、藤原氏の壓迫に對抗して紀氏の退勢を挽回しようとする努力が繰り返えされたが、その企てはすべて失敗に歸した。

直接聞ける機會もあったし、歌人業平を眼のあたりで、その息を接した親近感を覺えたのはもちろん業平に關する歌語りの數々を、文學に讀んだり世間の傳誦に聞いて知ったのではなく、有常の口から、時には、業平自身の口から直接聞くことさえあったのであろう。

みてきたように、少年時代の貫之は業平・敏行・有常という、當代隨一の歌人グループに圍まれて育ったわけであり、さらにその周邊には、僧正遍昭、素性法師の歌僧父子などが間接的に、和歌的な雰囲氣を盛り上げ、身近かには從兄紀友則がよき刺戟を與えるといった狀態で、仁和、寬平の和歌再昌期を迎えて青年貫之が和歌世界に身を投じるに至る準備の姿勢はすでに、十分に整っていたと思われる。 だだ、これらの先輩歌人たちがことごとく、攝關藤原氏の勢力圈から疎外され、[15] 現世的な希望に裏切られたとき、現實的な生活意識と旺盛な實行力とを持つ貫之にふさわしくない人間不信の念が、貫之生涯の精神構造の底流となっているとも考えられている。

土佐日記における、社會諷刺的な面があるのも、この人間不信の念に源を發した批判意識のあらわれであるが、貫之は決して、そのような醜い現實から眼を背け、身を退くような隱遁的敗北主義者ではなかった。

また、傳統的な和歌の世界に閉じこもって、疎外された生活意識にとらわれていた一部の隱遁的歌人とは違って、貫之はあくまでも新興歌壇の主流派であったし、現實的な生活意識をもって官僚社會を生き拔いて來た實際的な人物であった。 それだけに、彼の誠實が報いられなかった空しさというものは、一層深刻であったに違いないといえる。 この點で、富士谷御枝氏は、女性假託のことで、

> 貫之ぬし若年より和漢の才に長じ、こよにわが大御國ふりに通じ、年ごろ官途にもまことつくし功勞いたくつもりたりしかは、大國上國にも任せらるへきに、土佐守に任せられたること深き歎息なりしにこそとおぼしきなり。[16]

と論評しているように、紀氏家系の歷史的背景と彼自身の人生體驗とを綜合して、貫之の人生觀の深部には强い人間不信の念が流れていたかも知らない。

それに、土佐日記の最終の二月十六日條まで山崎の商賣の看板の變らぬ姿を見て、人情の賴み難きを吐き捨てるようにつぶやき、わが家の荒廢したありさまに長嘆息を吐く、精も根も盡きた人間貫之の弱さが、ここに初めて露呈しているのである。

愛兒を喪った哀傷も、老いを嘆く述懷も、そこには客觀的に自己の心情を評釋するだけの自照的

---

15 寬平年間の和歌再昌の氣運が貴族社會の上下にみなぎった時、20代の青年貫之は客氣に滿ちていた、宇多、道眞ラインの和歌再昌即ち復古維新の文化政策に隨順して、攝關藤原氏の專制をはね返し、人材登用の機會をつかんで紀氏の回興を夢見るが、寬平9年(897)宇多天皇の讓位とともに政局は更に一轉した新體制の指導者であった道眞が藤原氏一流の策謀によってあえなく失脚する、このような現實の厳しさを眼前にして少年のころからの貫之の腦裏の刻まれていた紀氏衰退の歷史がさまざまと記憶の中によみがえたのであろう。

16 富士谷御秋、「平安日記」(國語國文學研究史大成5)

餘裕を殘してはいたが、ふと人間不信の念を洩らすこの最終段階に至っては、「とまれ、かうまれ、とく破りてむ」と韜晦する以外に、全く救いはなかつたのであろう。

かつては、「古今集」撰進の榮營を與えられ、また「新撰和歌集」の單獨編纂の勅命を下された醍醐天皇、厚い庇護を受けていた兼輔、貫之の精神的支柱というべきこれらの人々を、土佐在任中に相次いで喪ったことは、彼にとって大きな痛手であったことは想像されよう。 それらの人々なき京に歸ってきた貫之の空しさ、無念さもまた察せられる。

即ち、醍醐歌壇の寵兒であった貫之にとって帝の崩御は歌の基盤の崩壞を意味しているし、名簿を提出し兼輔に官僚としての前途を預託していた貫之は、兼輔の薨去によって、官人的基盤を喪失する危機に直面した、貫之の絶望を思うべきである。

そうした悲痛な思いが「土佐日記」に投影されていないはずはなかろう。 がしかし、そのような喪失感、孤獨感、老殘の思いを、異鄕に失った愛娘への哀傷の思いの中で凝縮させ[17]ていると思う點からでも、公的述作、詠作には華々しい實績をもつ貫之にあって、どうしても女性假託という手段を講じたと思うものである。

上述の人間不信の念も一つの見解には違いないが、小稿で得ようとする答えにはならない。 上述の如く、悲慘な貫之としては、どうしても筆者には受けとれないのが率直な心情でもある。

これより、貫之の文藝學の先驅者たる面から、彼をあおいでみようと思う。 また結論的に、女性假託の根本的理由は、どこにあるかまでを、さぐってみようと思うのである。

土佐日記で一生を捧げたと言っても過言ではないと言える。 萩谷朴氏は次の如く問題を提議している。

> 作者の女性假託を宣言せしめ、かつ、この作品をして後世の文學史に大きな影響を殘さしめた根本的な理由は奈邊に存するのであろうか。[18]

と問いかけている。 これに對する答えは、昔から學者によって似たりよつたりで大同小異である。近世中期の研究者である上田秋成は、自筆本「土佐日記解」の中の序文で、

> 此日記のなれるは、貫之土佐の國の任みちて歸るべき年にいとかなしくせし子の病して死たりしを、あかすなげきをしたるかさすがに人めのめめしさを恥らひて、女ふみの樣に書れし……。[19]

---

17) 杉山吳昭「土佐日記－悲傷－」（解釋と鑑賞 587）によれば「女性假託からはじめて隨所で擬裝し韜晦する表現が多い土佐日記の中で、ときおり直情的な章に出會うことがある、それは京に生まれて、土佐に夭逝した愛娘に筆のおよぶときである、土佐日記の主題はいくつか考えられていて、また、それに對する反論もあるが、古注このかた、この亡兒を傷む哀切な叙述は土佐日記の主題あるいは創作動機となっていると考えられている」と悲傷感的立場をとっている。

18) 萩谷朴氏「土佐日記注釋」

19) 上田秋成氏「平安日記」（國語國文學研究史大成 5）

と、つまり任國で死去した嬰兒をいたみ悲しむのは男としてはあり得ないことと思われることを恥じて、女として書いたと述べている。 歌人岸本由豆流の「土佐日記考證」では、

> さて家々の記錄といへるものはみな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば女のわざならす……。[20]

と書きしるしている。 これは家々の記錄や日記は男子が漢文でしるすわざであるのを、假名で書いたのは女々しいわざであるから女性假託にしていると言っているのである。

また、岸本由豆流が「なべて世に土佐日記といえば、まづこの抄を見ることはなりぬ」と記しているように、近世を通じて研究者の 必見の書として重實がられた、北村季吟の「土佐日記抄」では、

> 女のわざとしたのも、最後に「とく破りてむ」と書きとめたのもすべて謙退の詞。[21]

であると述べている。 上述の上田・岸本・北村氏らの見解を見てきたように、彼らは「女のわざ」であるがために、公には恥かしいから、と口を揃えて言っているが、現代の諸學者たちの見方は、もっと眞に迫っている。 先づ、五十嵐力氏の「平安朝文學史」では、

> 彼は一種の革命兒で、目の敵とした漢文に劣らぬ和文を、さらに俗にくだけた下手物文學を創始しようとした。[22]

と述べているように、氏の見解は貫之こそ日本平安女流文學の發火の引きがねのようなものであるという立場をとっているのである。 まだ、石川徹氏は、

> 漢土を重んじ自國を卑しめる當時の一般風潮をあきたらなく思う貫之が、その日頃の主張であり、古今集編纂頃から抱いて來た國風宣揚の氣持ちを述べるためには女に代辯させるのが、よりふさわしかつたためで、その女性は和歌和文の精ともいうべきものであつた、而も日記の中で徹底して女の筆として一貫させなかつたのは、肝腎の點は貫之の主張として心ある知己には知つてもらうためであつた。[23]

と述べられている。 つまり氏の言うところは、この日記は、歌論書的性格を持つ作品であるということである。 そのことは、この日記を觀ると、隨處に展開されている歌論的叙述は、この作

---

20) 岸本由豆流氏：前掲書 p.38. 岸本氏は父の遺業を繼ぎ文化 6 年(1809) 土佐日記の研究に着手し、6 年を經て「土佐日記考證」を完成した、彼は村田春海の門人、この研究においては綿密な校合と精細な考證ぶりを示し、諸本研究の面でも、本文批評の面も、從來に比を見ぬ業績を示している。

21) 北村季吟：寛文元年(1661) 注解に着手し後水尾上皇への奏覽本を書いた。 注解にあっては、日記の 本文を小節にくぎって掲げ、次に語句の解釋考證などを行なっている。

22) 五十嵐力氏「放たれたる文學土佐日記」(日本文學史 912 年)

23) 石川徹氏「土佐日記における虛構の意義」(國文學の新研究昭 25 年 7 月)

品の第一主題に基づくのである。 この日記における歌論的要素は、ただ量的に、多數であるばかりではなく、それが互いに前後照應する形で配置されていたり、反復學習の方式をとって、くり返し叙述されていたり、歌學のすべての部門にゆきわたる體系的なバランスが保たれていたり、更に、そうした歌論を展開するために、日記や紀行の本質たる實錄性や報告性を犠牲にする脚色虚構をあえて試み、年少讀者に對する誘掖的な配慮を加えるなど、大きに構成的であり、著しく教育的な創作意識が明らかに指摘されるのであるから、石川徹氏の指摘しているように、歌論的主題の存在をも認めなければならない。 ただ當時、漢文を重んじる風潮を氣にしながら女性假託にして自由氣ままに論じたということになる。もうすこしくわしく言うならば、漢文の公事記錄に對して、假名の私生活中心の氣樂な日記と國風宣揚的なものをおりまぜることを志し、上下脱いだ私人の姿になるために一應女性に假託した風に書きはじめたものであったが、その内容性格は自己中心とした自由な心情をはばかりなく書きあらわしたものであったものであった。 個我を殺したような公の記錄的日記に對して自己を中心とした自己の心情を記錄への道を初めて切り開いたものということができる。

さて、女性假託の根本的な理由はどこにあるか、と、問いかけた、萩谷朴氏は、この假名書き和文日記という外面的な形態のためではなく、記錄から文學へと脱皮した質的轉換、内面的深化にあるのである。 と述べさらに、皮肉なことに土佐日記の文學的價値は、それが自ら日記たることを否定したところに生じたのであり、さらに、一日も缺かさない日なみの記の様式をとっている點において、最も典型的な日記であるかのごとく見えるが、そこには、日記の本質たる實錄性を大幅に否定した脚色虚構の著しい導入がある。 といい、さらにまた。 客觀的なその日の事書きとしこの記錄には思いもおよばない赤裸々な心情の告白があり、また、實錄性を著しく減殺することによって日記の埒外にとび出し、自照性を大きく持ち込むことによって文學に昇華した點において、日本最初のいわゆる「日記文學」として、不朽の生命を宿し得たのであり、かつ貫之自身の抱負もそこにあったものと考えられるといい、さらに、この作品において、日記ということは單なる様式形態に過ぎず、作品の主題たり得ないものであったし、他の歌論的主題や諷刺的主題とともに、その自照的主題が、はじめてこの作品に文學として價値を賦與したのであるといい、この作品の冒頭に、貫之が、筆者を女性であるかのごとく擬装し、そのことを宣言したということは、この作品の創作意圖と重大なかかわりあいがある。 といいさらに男性でありながら女子常用の女文字たる假名を用いて日記を書くのだから、筆者を女性に假託したという單純な意味ではないと斷言しながら、女性の手になる文藝作品には、通例作者の自署のない當時のこと、假名書き和文の日記であれば、黙っていても讀者はその作者が女性であると理解したはずであるのに、どうして女性假託を宣言したか、それは、從來の日記の概念からその本質たる實錄性を大きく割引いて、そこに自己反照の文藝的本質を持ち込み、記錄としての日記という文獻形態をかりて、本質的には著しく異なった日記文

貫之――「一以貫之」という名前の如く、和歌再昌とか國風宣揚の精神を、孤立無援の中にあって、堂々とむこうをはって、晩年の作であるこの土佐日記に、すべてをかけて、自分の意圖するところをくまなく書き貫いたことに對して、ただ驚嘆するのみである。

その孤獨な斗い、だがひねくれもせず、柔軟にしてかつ大膽な氣構えは、かって公事記錄的な日記の性格を打破し、それを昇華させ、それを假名書きによる自己觀照的な內容を持つ、文學的日記の道しるべを示したこと、こういう文學者が貫之以前にも存在していたのだろうか。

本稿では、どうして女性假託にしたかを中心主題にして、それをひもどくために、先づ彼の功績からみた文藝史的位置を定立させてみた。　その中で、漢文による日記の性格を考察して、女性假託にしなければならなかった貫之の立場をあらかじめ間接的に暗示する方法を取ってみたのである。

女性假託の問題では、二つの側面から考察しながら、少年貫之の周邊を再照明しながらその周邊から反映された暗い面をさぐってみたが、筆者が追求する滿足な答えは得られなかったのである。

だが、いろいろと諸先賢のご意見をうかがうという形で、日記文學という新しいジャンルを開拓するための画期的な跳躍臺として、女性假託の效果を豫想しての開卷一句の宣言であるという結論に至ったのである。

参　考　文　献

1）久松潛一編「日本文學史」（「中古」至文堂昭 56）
2）臼田甚五郎外三人「王朝日記」（「日本古典文學鑑賞」角川書店昭 52）
3）藤岡作太郎「國文學全史」（「平安朝篇」平凡社昭 55）
4）萩谷朴「土佐日記全注釋」（角川書店昭 57）
5）小西甚一「土佐日記評解」（有精堂昭 53）
6）池田龜鑑「土佐日記」（「學燈社文庫」學燈社）
7）三谷榮一「土佐日記」（「角川文庫」角川書店昭 56）
8）鈴木知太郎外三人「土佐日記外三編」（「日本古典文學大系 20」岩波書店昭 56）
9）「平安朝日記 1」（「日本文學研究資料叢書」有精堂昭 57）
10）「平安日記」（「國語國文學研究史大成 5」三省堂昭 53）
11）「國文學解釋と鑑賞」至文堂の
「日記文學」（昭和 29.1）
「平安女流日記文學」（昭 36.2）
「王朝日記の情趣と背景」（昭 36.2）
「紀貫之――醒めた意識の悲しみ（昭 54.2）
「日記と人生」（昭 56.1）

國 文 抄 錄

日本의 平安女流日記文學을 硏究하려고 하면 우선 이 土佐日記를 밟고 지나가지 않으면 안될 만큼 土佐日記란 作品이 갖는 비중이 클 뿐 만 아니라 日本文學史上 作者인 紀貫之가 차지하는 위치도 넓으며 깊다.

平安女流日記文學에 있어서 시니컬한 點은 先驅者인 紀貫之가 男子란 점이다. 그 자신 男子이면서도 土佐日記에서는 開卷 第一句에서 「남자도 쓰는 日記를 女子도 써 보겠다」고 作者가 女子라고 假託한 점이다. 많은 學者들 사이에서 왜 女性假託을 했으며 그 의도하는 바는 나변에 있는가 하고 여러가지로 논란되어지고 있는 문제이다.

筆者는 平安女流文學에 흥미를 느껴 연구해 왔으나 그 경력은 아직 얕다. 그러나 계속 연구하려고 하면, 먼저 土佐日記가 지니고 있는 문제점부터 하나씩 밝혀 나가 보려고 本稿를 쓰는 바이다.

本稿에서는 왜 紀貫之가 女性假託을 했는가 하는 것을 中心主題로 해서, 제 1 장에서 紀貫之의 그 文藝史的 위치를 정립시켜 보려 노력했고, 제 2 장에서는 女性假託의 문제를 ①人間不信의 念 ②文藝學의 先驅者的인 면, 이 兩面으로 모색해서, 그의 政治的, 그 家門的 그리고 少年 貫之의 어두운 면 등으로 人間不信의 念이란 一斷面을 照明해 봤지만 筆者에게는 만족스럽지 못했었다.

역시 필자에게는 文藝學의 先驅者적인 面으로 그의 투지와 希望을 엿볼 수가 있었으며, 왜 女成假託을 했었느냐 하는 것은 이 土佐日記 以前까지의 日記의 개념으로 그 본질인 實錄性을 排除해서, 自己反照의 文藝的 本質을 끌어들여 本質的으로 이전의 日記와 다른 日記文學이란 새로운 장르를 開拓하기 위한 劃期的인 조약대로서 女性假託의 효과를 예상해서 그것을 선언했다는 대답을 얻게 됨에 따라 筆者는 紀貫之가 女流日記文學을 開花시킨 선구자라는 결론을 얻게 되었다.